

網膜剥離

松下 卓郎
大塚眼科医院

1. 網膜の働き

眼球はよくカメラに例えられます、デジカメ時代になって、最近は説得力がなくなりましたが、網膜はカメラのフィルムにあたる眼球の底に広がる薄い膜組織です。網膜には光や色を感じる視細胞とそれにつながる神経線維が分布していて、神経線維は一本の視神経となって、脳内につながっていきます。

網膜の能力は場所によって大きく異なっていて、ちょうど真ん中の黄斑部の感度が最も高くなっています。視野の中心であり、視力は黄斑部の機能と言えます（図1）。

2. 網膜剥離はどんな病気

網膜は光や色を感じる神経網膜と、その下にある網膜色素上皮の二層構造になっていて、神経網膜が色素上皮から剥がれるのが網膜剥離です。

神経網膜への栄養は、主として色素上皮を通して外側から供給されているので、神経網膜が剥がれると栄養供給が不足して、視細胞がダメージを受けて機能が低下します。そのため剥離部分が担っている視野が見えにくくなります。黄斑部の網膜が剥離すると視力が落ちることになります。

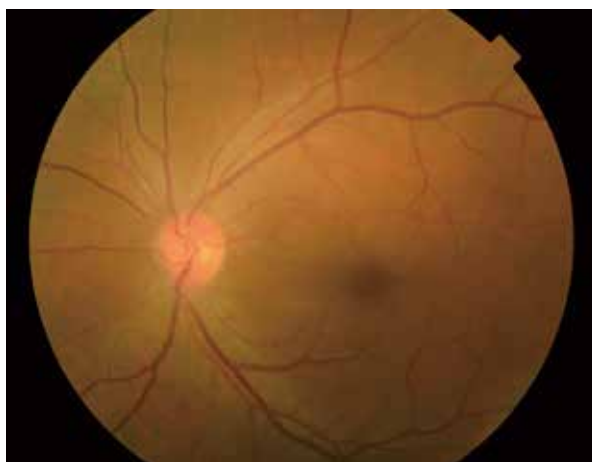


図1 正常眼底

網膜剥離には2種類あり、神経網膜に孔（裂孔）が出来て起こる裂孔原性網膜剥離と眼内に出来た別の病気に続発して起きる、孔を伴わない網膜剥離があります。今回は裂孔原性網膜剥離についてお話しします。

3. 網膜剥離の原因

網膜剥離は裂孔の出来方から、大きく中年タイプと若年タイプに分かれます。網膜に接して硝子体という透明なゼリーのようなものがあり、加齢による変化で形を変えたときに、硝子体と網膜の癒着が強い場所があると、網膜に裂孔ができることがあります。網膜裂孔から硝子体の液体成分が神経網膜の裏側にまわり、神経網膜が網膜色素上皮から剥離していきます。これが中年タイプの網膜剥離です。また、強度の近視や遺伝的な素因などで網膜に萎縮性の孔が生じることもあります。若年タイプの網膜剥離は、このような萎縮孔から硝子体が入り込むことによって起こる場合がほとんどです。割合は少ないのですが、眼球の打撲などで急激に眼球が変形して裂孔が発生することもあります。

アトピー性皮膚炎で、顔面の皮膚症状が悪い人が網膜剥離になることがあります。かゆみからまぶたをこすったり、たたいたりすることが誘因になっている可能性が指摘されています。

4. 網膜剥離の症状

網膜剥離の症状は剥離した網膜の状態により色々です。全く自覚症状がないときもあります。

視界に何か浮遊物の影が移動するように見える飛蚊症、視界の隅に光が走る光視症があったら、網膜剥離が起きている可能性があります。網膜剥離が進行すると視野が狭くなって感じます。黄斑部に網膜剥離が及ぶと、ゆがんで見えたり視力が低下します。また、進行の具合も急激だったりゆっくりだったり様々なのです。

5. 網膜剥離の検査

網膜剥離は、目の外側から見ただけでは判断できません。眼底検査といって、瞳を広げる（散瞳）目薬を点眼してから瞳孔から光を入れて観察します。散瞳状態は数時間持続しますので、その間、まぶしくなり、近くのものが見にくい状態が続きます。

6. 網膜剥離の治療

網膜裂孔だけで、網膜剥離がない状態であれば、網膜裂孔のまわりの網膜を凝固することで神経網膜と網膜色素上皮を癒着させ、網膜剥離への進行を防げることがあります。凝



図2 網膜剥離写真(1)

左側の白っぽく見えるのが剥離した網膜です。



図3 網膜剥離写真(2)

(1)の先を見ると大きな網膜裂孔があります。

固方法には網膜光凝固（レーザー）と網膜冷凍凝固があり、多くは外来の手術です。

網膜剥離が進行していたら（図2、3）、手術が必要です。手術は、目の外側からアプローチする強膜バックル術と内側から直す硝子体手術に大別できます。

強膜バックル術は、網膜裂孔に位置する眼球の外側（強膜）にシリコンスポンジ材料を縫い付けて、眼球を内側に凹ませ、色素上皮を剥離した網膜に近づけます。そして、網膜裂孔のまわりを強膜側から冷凍凝固します。場合によっては、網膜の下の液体を強膜側から針で穴をあけて排液します。

硝子体手術は、眼内に非常に細い器具を挿入して、硝子体や網膜をひっぱっている膜状組織を除去します。続いて硝子体内に気体を注入して、剥離した網膜を色素上皮側におしつけます。同時に網膜裂孔から網膜の下の液体を吸引します。網膜裂孔は手術中に眼内か

らレーザー凝固します。通常、白内障手術を同時に行います。

7. 網膜剥離の予後

網膜剥離を放っておくと、網膜は全部剥がれてしまい失明してしまいます。網膜剥離の治療は失明を防ぐためのもので、手術が進歩して、網膜が元の位置に戻る復位率は100%に近づいています。網膜が元の位置に戻っても、目の機能、視力などがどの程度回復するかは、剥離した範囲、時間などにより異なります。原則として、速やかな手術が必要なのです。怪しいなという症状が出たら、億劫がらずに眼底検査を受けましょう。